

## ⑪チャネルキャットフィッシュ

チャネルキャットフィッシュ (*Ictalurus punctatus*) アメリカナマズ科  
原産地：北アメリカ

導入経緯：水産目的で1971年に国内に初導入され、茨城県霞ヶ浦には1981年に導入された。1994年以降に急激に増加した。

生態：水温0～32℃で生息可能で湖沼、河川下流域に生息する。肉食性で魚類、甲殻類、貝類、水生昆虫類、小型哺乳類も捕食する。最大体長は1mを超え、食用として美味とされる。

### 【調査結果概要】

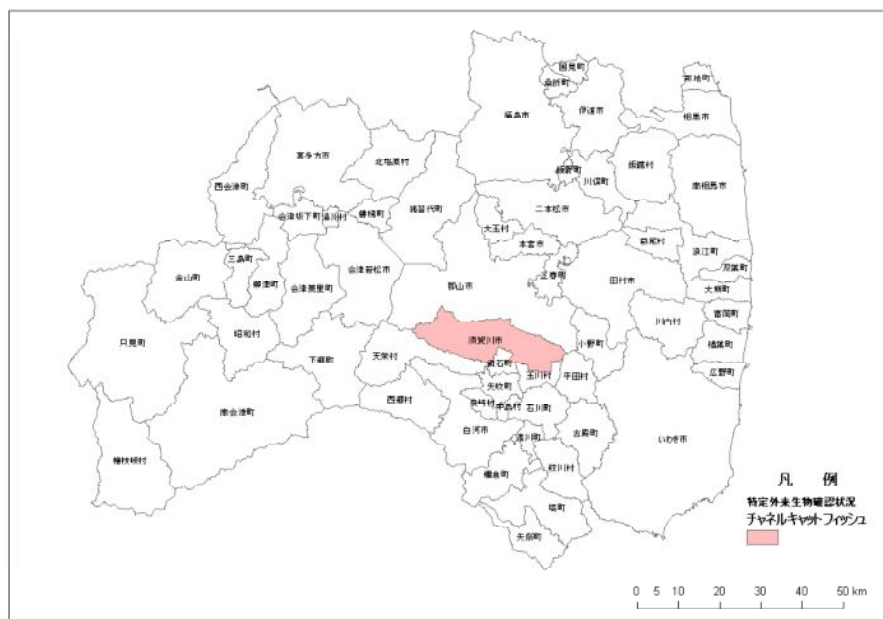
平成17年8月に、須賀川市阿武隈川において実施された福島河川国道事務所の調査により確認された。

魚食性で、魚類やエビ類を捕食していることが報告されており、生態系への影響が懸念される。

全国的には、茨城県、千葉県内の利根川水系において生息が確認されており、漁業対象種への被害をもたらしている。霞ヶ浦では水産有用種の保護を目的として、平成14年に駆除の対象となっており、漁業者、茨城県による駆除活動が実施されている。

現時点では、本県における被害の状況については不明であるが、全国では漁業への被害が深刻化している事例もあることから、今後も継続的に情報を収集し、必要に応じて対策を検討する必要がある。

### 文献調査によりチャネルキャットフィッシュが確認された市町村



## ⑫ウチダザリガニ

ウチダザリガニ (*Pacifastacus leniusculus*) ウチダザリガニ科  
原産地：北アメリカ

導入経緯：食用を目的として、1926年から30年にかけて水産庁がアメリカのオレゴン州より導入したことが始まりとされている。  
その後、全国各地で養殖が試みられたが、気候等の条件があわず失敗したとの記録がある。

生態：河川湖沼に生息する。冷涼な水域を好み、魚類、底生生物、水草、落葉などを食べる。

### 【調査結果概要】

文献調査によると、北塩原村の小野川湖において大量の繁殖が確認されている。導入経緯については、不明であるが、全国的な分布状況から見て人為的な導入と考えられる（現在、国内で生息が確認されているのは、北海道、福島県、石川県、滋賀県）。

今回のアンケート調査では、北塩原村、猪苗代町から目撃情報が寄せられた。桧原湖と猪苗代湖、秋元湖でも繁殖が確認されており、秋元湖では秋元水門の下でも確認されていることから、長瀬川下流に生息域を拡大しつつあることが伺える。

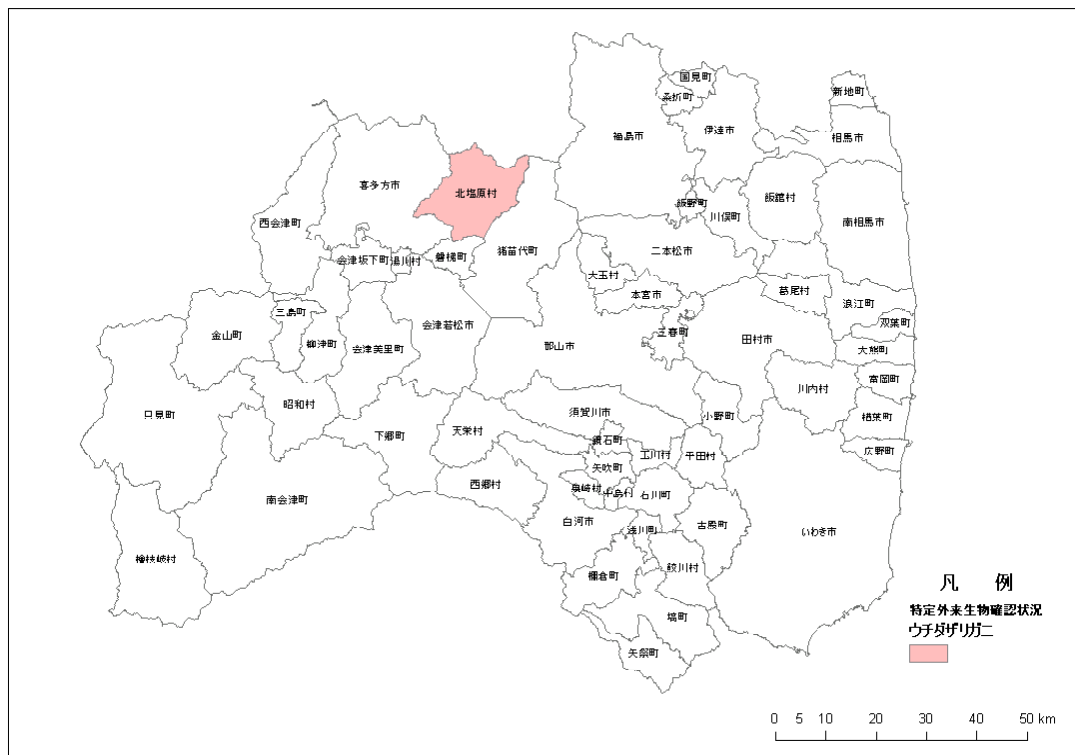
漁業に関する被害では、刺し網漁の際に漁獲物（イワナ）を食害される、複雑に網に絡むため、取り外し作業に労力を要し漁労作業に支障をきたすことなどが報告されている。

在来種への被害は、現時点では顕著なものは確認されていないが、かなりの数のウチダザリガニが生息していることから、相当数の底生動物が補食されていると考えられる。また、巻き貝や水草も利用していると考えられる。

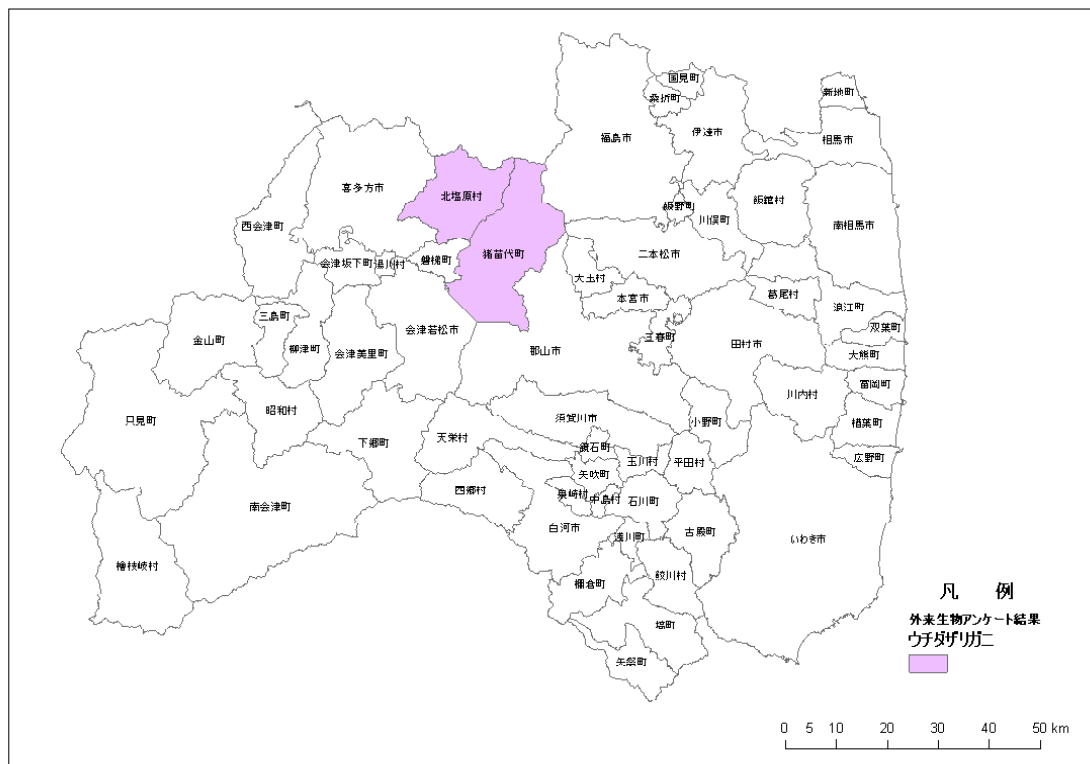


ウチダザリガニ；福島県野生動植物保護アドバイザー 山中實氏 撮影

文献調査によりウチダザリガニが確認された市町村



アンケート調査によりウチダザリガニが確認された市町村



### ⑬セイヨウオオマルハナバチ

セイヨウオオマルハナバチ (*Bombus terrestris*) ミツバチ科

原産地：ヨーロッパ

導入経緯：1992年より国内のハウストマトの授粉用に大量に導入された。  
ハウス栽培施設から個体が逸出して野生化したと考えられる。

生 態：春～秋に繁殖し、海外では年2回以上の繁殖が確認されている。  
女王を中心とする大家族を蜜と花粉だけで維持するため、春から秋  
までは絶え間なく花が利用できないと生活できない。マルハナバチ  
類の中でもとりわけ大きな競争力を持つ種である

#### 【調査結果概要】

専門家へのヒアリングによると、県内での初確認は平成10年の南会津町(旧南郷村)であり、トマトハウス近くのリンドウ畑に訪花している姿が目撃されている。

その後、平成13年には南会津町(旧伊南村)で、平成14年には、南相馬市(旧原町市)、新地町、南会津町(旧伊南村、南郷村)で、平成15年、16年には南相馬市(旧原町市)、新地町で確認されている。なお、平成17年には目撃が無く、平成18年には南相馬市原町区で目撃されている。これまでの調査では、いずれもトマトハウスの近傍で確認されている。

現時点では野生繁殖は確認されておらず、確認された個体は農業用施設からの逸出の可能性が高いと考えられる。

セイヨウオオマルハナバチによる影響としては、在来マルハナバチ類との競合や盗蜜行動(花の付け根部分に開けた穴から蜜を吸う行動)による在来種の種子生産の阻害等が考えられるが、本県における具体的な影響は明らかとなっていない。

現時点では、情報が不足しており、継続して情報収集を行う必要がある。

写真：ハナマメで盗蜜するセイヨウオオマルハナバチ(撮影：掃部千鶴氏)





#### ⑭オオキンケイギク

オオキンケイギク (*Coreopsis lanceolata* L.) キク科 原産地：北アメリカ

導入経緯：1880年代に観賞用、緑化材料として国内各地に導入された。

冬季の地被効果が高く道路の法面緑化や工事修復地の緑化に用いられた。

生態：路傍、河川敷、線路際、海岸などに生育する。繁殖力が旺盛で種子は風で運ばれやすいため、各地の河川や道路周辺に大群落を形成する。

#### 【調査結果概要】

文献調査によると、県内では7市町村において確認記録がある。ワイルドフラワーによる緑化で全国的に多用された経緯があり、本県においても、各地の路傍、河川敷などに植栽されている可能性が高い。

花期は5月から6月であるため、今回の8月末のアンケート調査で寄せられた情報はなかったが、やせた土地や荒れた土地でも生育が可能であり繁殖力が強いことから、生育範囲の拡大による県内の在来種への影響が懸念される。

他県では、花が美しく、長年、地域住民に親しまれてきたことから、開花期の刈り取りには、苦情が寄せられる等、対応に苦慮しているケースがある。

オオキンケイギク；環境省HPより





## ⑮オオハンゴンソウ

オオハンゴンソウ (*Rudbeckia laciniata* Linn.) キク科 原産地：北アメリカ

導入経緯：日本には園芸植物として明治時代に導入された。その後、河辺や草原・荒地などに広がり、北海道から本州の中部以北の地域を中心に広く生育している。

生態：河辺、草原、荒地などに生育する。草丈が2m以上になり、種子とともに地下茎で繁殖する多年草である。

### 【調査結果概要】

文献調査によると 11 市町村で確認記録がある。本種は繁殖力が旺盛であり、急速な分布の拡大が懸念される。

また、希少な野生動植物が多い裏磐梯の自然公園内でも生育が確認されており、生態系への影響が懸念される。花期が 10 月頃までであることから、今回のアンケート調査においても生育情報が多数寄せられており、県内のほぼ全域において確認されている状況である。

なお、県内では裏磐梯地区パークボランティアによる除去作業が 5 年以上前より実施されていることが、アンケートにより報告されている。

全国での取り組み事例としては、栃木県日光国立公園の奥日光地域で、昭和 51 年より継続的に対策が実施されている。戦場ヶ原ではオオハンゴンソウが一掃されるなど一定の効果は認められている一方、中禅寺湖や湯ノ湖の周辺地域へと生育範囲が拡大していることが確認されており、除去活動は収束していない。

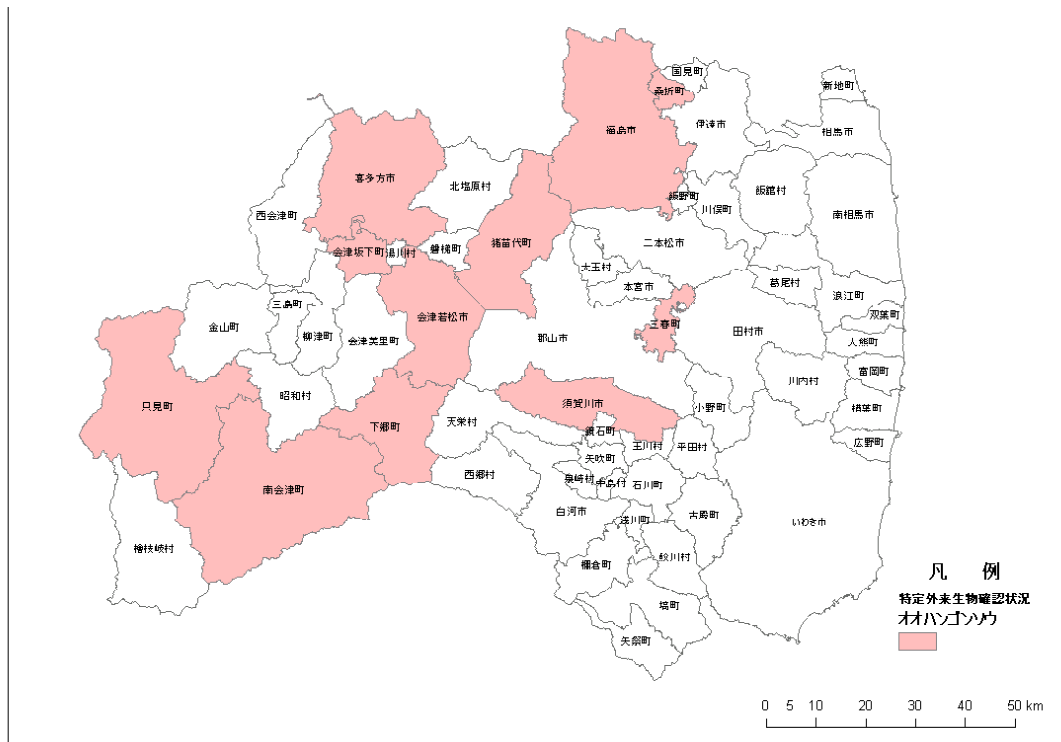


オオハンゴンソウ

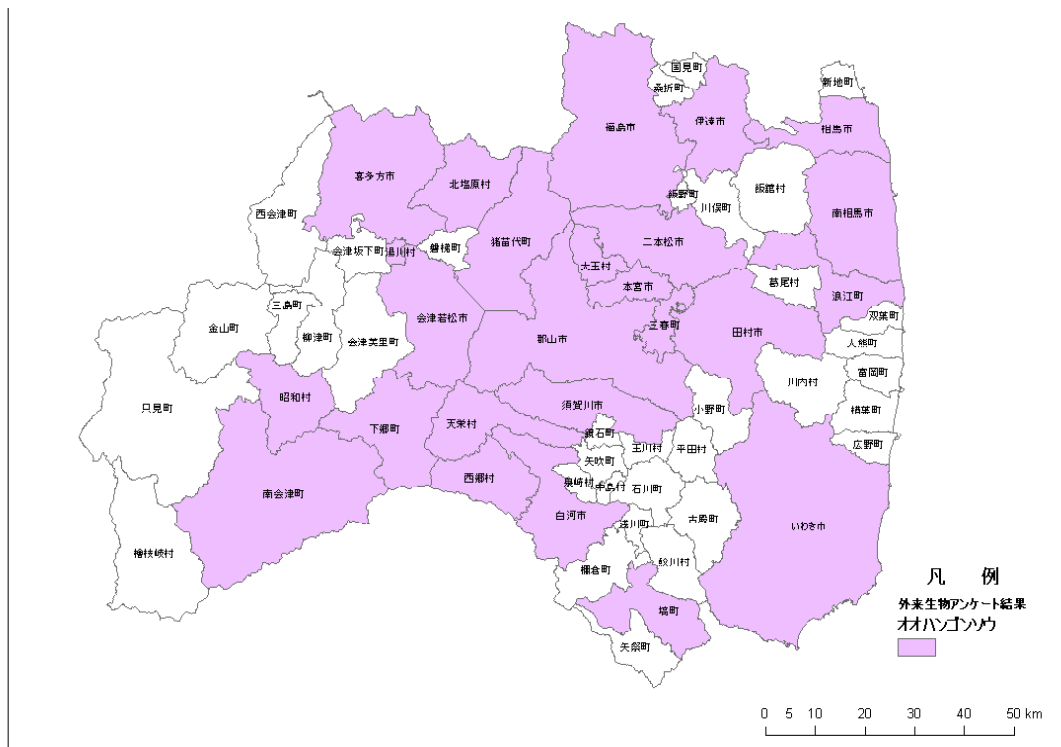
(福島県野生動植物保護サポーター 須賀 紀一氏 撮影)



文献調査によりオオハンゴンソウが確認された市町村



アンケート調査によりオオハンゴンソウが確認された市町村



## ⑩ナルトサワギク

ナルトサワギク (*Senecio madagascariensis*) キク科 原産地：マダガスカル島

導入経緯：国内へは、埋立地の緑化材料を国外から輸入した際に種子が混入して導入されたと考えられており、1976年に徳島県鳴門市で確認されている。

生態：温帯から暖帯に分布し、海辺の埋立地、空地、路傍、河川などに生育する。繁殖力が強い。葉に毒性を持つ。開花は周年。

### 【調査結果概要】

本種は、2006年にいわき市泉町の海岸近くの道路脇で生育が確認された。東北地方では初確認であり、現時点では生育域の拡大は確認されていない。

国内では、徳島県および兵庫県のほか、和歌山県、岡山県、高知県、鹿児島県でも確認されている。

また、タンポポのような綿毛を飛ばして繁殖し、繁殖力が強いことから、今後も継続して情報収集を行うとともに、分布域が拡大する前に除去等の対策を行う必要がある。

ナルトサワギク：環境省HPより





## ⑰オオカワヂシャ

オオカワヂシャ (*Veronica anagallis-aquatica*) ゴマノハグサ科

原産地：ヨーロッパ、アジア北部

導入経緯：1867年に神奈川県相模で採集された。水草等として輸入・流通はしておらず、侵入経路及び侵入時期については不明である。

生態：湖沼、河川の岸辺、水田、湿地等に生育する。4～9月に開花し、種子は風、雨、動物などにより運ばれ、根茎でも繁殖する。関東・中部地方では野生化している。

### 【調査結果概況】

文献調査によると、平成13年7月の阿武隈川における河川水辺の国勢調査で桑折町、国見町に設定された調査区域での確認記録がある。

今回のアンケート調査からは、確認情報は得られなかった。

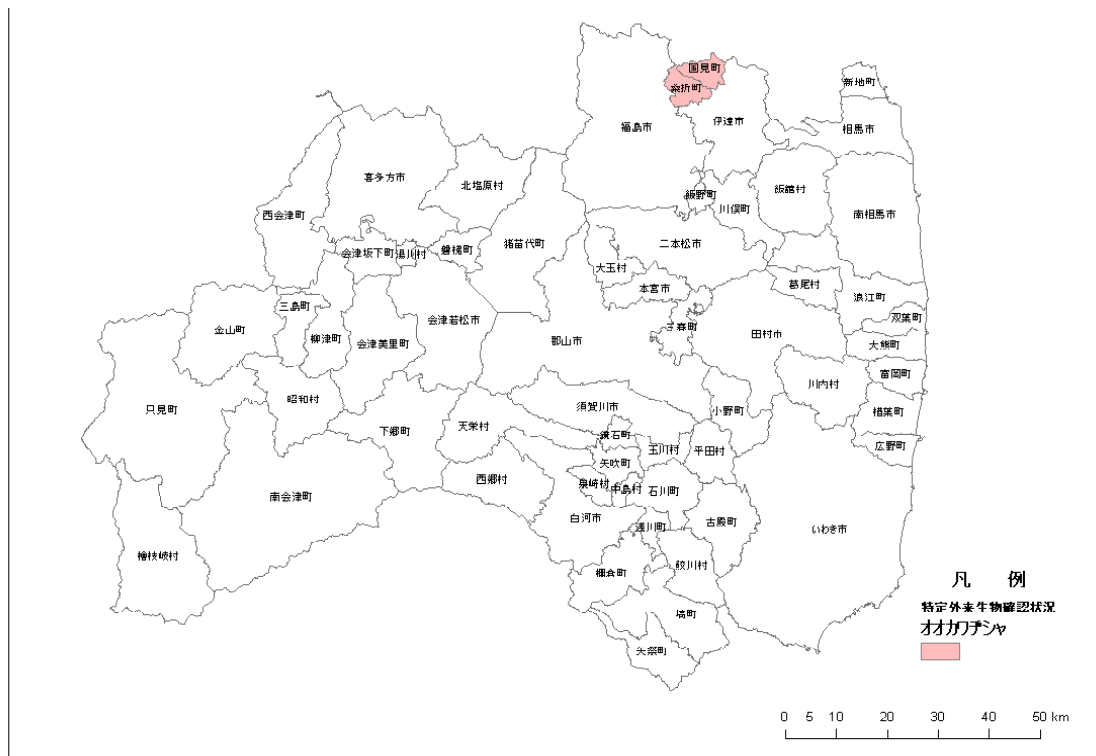
本種は、在来種のカワヂシャ（レッドデータブックふくしま；準絶滅危惧、全国カテゴリー；準絶滅危惧）と交雑して、雑種ホナガカワヂシャを形成することが知られている。

福島県内においては、現時点では雑種に関する情報は得られていない。

オオカワヂシャ（環境省HPより）



# 文献調査によりオオカワヂシャが確認された市町村



## ⑱ アレチウリ

アレチウリ (*Sicyos angulatus* Linn.) ウリ科 原産地：北アメリカ

導入経緯：アメリカ、カナダからの輸入大豆に種子が混入し、国内に導入され拡大したとされる。近年では飼料畑や河川敷で多数の生育が確認されている。

生態：土壌環境に対する適応性が大きく、有機質の多い汚染河川岸に非常に多く生育する。1株あたり400～500個の種子をつける。種子には休眠性がある。

### 【調査結果概要】

文献調査によると県内においては 20 市町村で確認記録がある。

また、アンケート調査からは、24 市町村での目撃情報が寄せられており、県内のほぼ全域において確認されている状況である。

阿武隈川、阿賀川流域のほか、浜通り地方の河川流域でも分布が確認されており、河川敷、荒地等の日当たりの良い場所を好むことから、河川流域を中心として県内全域に広く分布しているものと考えられる

本種による影響としては、アンケート調査によりヨシ、ウマノスズクサ、ヨモギ等の川原に生育する草本植物を被圧することが報告されている。

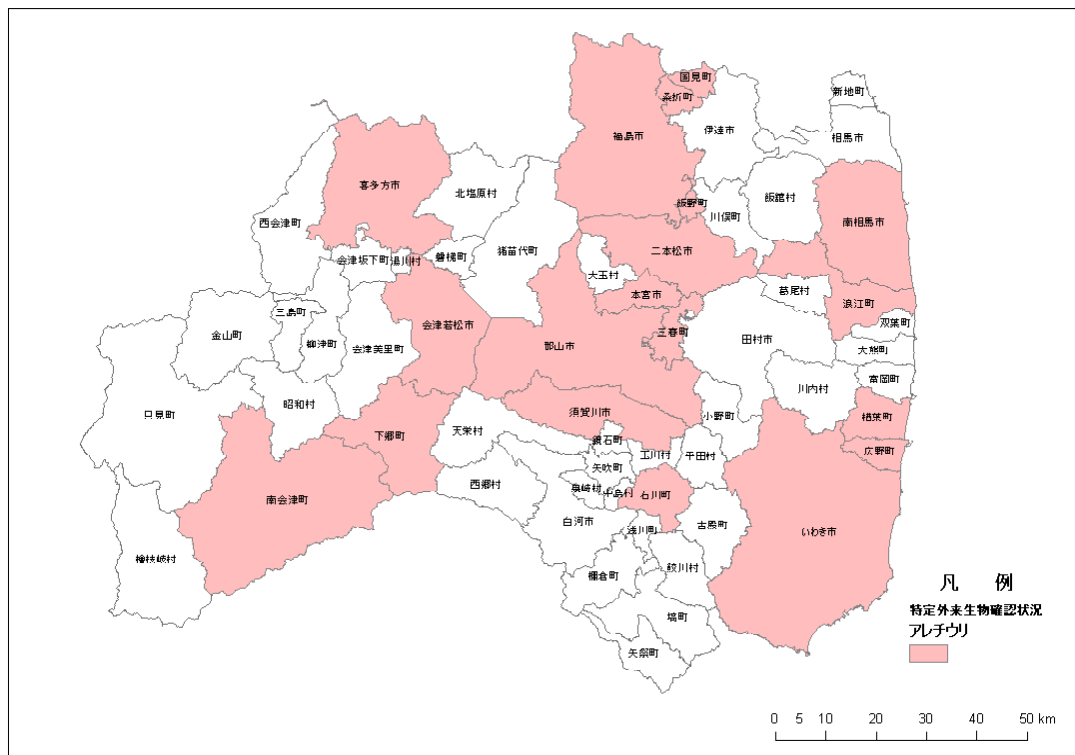


福島県野生動植物保護アドバイザー  
山中 實氏 撮影



二本松市内  
福島県野生動植物保護サポーター  
須賀 紀一氏 撮影

文献調査によりアレチウリが確認された市町村



アンケート調査によりアレチウリが確認された市町村

